

レナード・ウルフのプロフィールⅣ -その自伝を通して-

著者	大屋 富久代
雑誌名	長崎外大論叢
号	4
ページ	21-31
発行年	2002-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000294/



レナード・ウルフのプロフィールIV

—その自伝を通して—

大屋 富久代

1914年に始まり、1918年に終わった世界大戦は、千万の人々を殺し、三千六百万の人々に犠牲を強い、莫大な浪費の果てに終結した。レナードは、戦勝の喜びとは無縁の人々の一人であった。戦争は戦前にはあった希望と光明を消し去り、国家権力の脅威と暗黒が、個人の内部に不安と野蛮さを鉄壁の運命として受け入れさせた。好んで始めた戦争でなくても、戦時下では、好戦的であることが英雄的であり、忠誠心の証しとみなされるのは、どこの国でも同じであろうから、平和を求める活動は、人々の冷たい視線に晒された。レナードは、ユダヤ人であることの不利をあからさまにする気配は全くないし、身の処し方や生活上の嗜好は、英国風とはこういうものなのかと思わせるものでありながら、彼の内奥には、常に旧約の世界を生きた父祖たちの精神が息づいていて、この地上に生きるべく運命づけられた個としての意欲が先立つのであって、制度としての国家や社会は常にその後に従うものとして意識されている。

その個人を個人たらしめてくれる場所が家である。レナードは、モンクス・ハウスとならんで、リッチモンドに見つけたホガス・ハウスに殊の外、愛着を持った。彼にとって、家は、確かに、レンガやモルタルでできた物資ではあるが、そこに住む人たちの人格を決めるものでもある。生まれて墓に入るまで存在の拠点となる住居は、いわば、個人の人生そのものと言える。レナードは、住居は、一人の個人にとって、学校や仕事や結婚や、更に、死や別離や戦争にさえ劣らず、個人の歴史をかたどるものであると断言する。かけがえのない個としての自分自身はこの地上にしかあり得ない故に、住居はその固有の時間を保証し証明するものである。

レナードは、この二つの家の由来とされるものが、辻褄の合わないものであることに、白けた思いを味ったのだが、その家を住み継いできた無名の家族の人生は、静謐な気配に昇華されて、物としての建築物に際立った個性を与えていた。モンクス・ハウスを買い取った時、競売のために広げられた家財道具は、時間の臓腑の如くであった。住む人を囲む壁や窓や、果樹や花の植わった庭が、住み継いできた人たちの息吹と共に、ヴァージニアの精神を静め、レナードの心の鎧を脱がせたのである。

ホガス・プレスから、ヴァージニアの『キュー・ガーデン』、『壁のしみ』、T. S. エリオットの『詩集』その他を出版した。尤も、それからの収益は微々たるものであった。ヴァージニアが小説家として経済的に自立できたのは40歳になってからである。もし、彼女が当時、生活費を稼がなければならなかったとしたら、おそらく小説を書くことはなかったのではないかと

レナードは回想する。彼は生活に墮することなく二人の経済的基盤を築いたことに密かな自負を抱いていたであろう。

レナードは有償無償の仕事をこなした。『インタナショナル・レビュー』の編集をし、同時に、フリーランスのジャーナリストとして、主として、『ニュー・ステーツマン』に記事を書いた。二度と戦争を起こさない世界をつくるのが、彼のライフワークであった。平和を持続するためには、戦後の複雑な世界情勢を一般の人々が理解することが必要である。その手段としてレナードは、フランス、ドイツ、イタリア、スペインの月刊誌に目を通し、『レビュー』に「国際日誌」(International Diary)を執筆した。更に他国の実情を把握するためにはどんな苦勞も厭わなかった。大戦後の錯綜した国際関係を客観的に理解するためには事実を知らねばならない。事実を知ることが、偏見にではなく、真実に到る方法である。彼が信条とする知的なやり方である。

資料を手に入れようとして、レナードはいくつか奇怪な経験をした。彼は、いつの頃からか二人のロシア国籍のユダヤ人と友達になっていた。ロートスタインはボルシェヴィキ政府の密使で、ロンドンに住んでいた。ある時、レナードに、レーニンの演説集を出版しないかと持ちかけてきた。承知すると、検閲を避けるために街路ですれ違いざまに原稿を手渡すことにするという。レナードは驚いたが、兎に角、首尾よく受け取って印刷所に入れた。途端に官憲の手が回り、出版は実現しなかった。レナードは検閲が如何に極秘に行われているかに、今更ながら呆れた。一旦、知識や意見を抑圧し始めると、権力は危険思想という強迫観念にとりつかれて、平衡感覚を失い、独り、青鉛筆を手役に坐って、すべての知識や思想を抑圧し始めるのである。

もう一人の友人、マースキーは、貴族であった。彼はシベリアに流刑になるか、肅清されることが分かっているにも、それを宿命と受け入れて、スターリンのロシアに帰っていった。さらに、もう一人、ロシア人の科学者と結婚した若い英国女性がいた。若者にありがちな一途さで、働くもののユートピアとしてのロシアに憧れ、夫と共に希望に溢れて、その理想の国へと旅立っていった。年に一度、帰国する度に、レナードを訪ねてきたのだが、年毎に彼女の表情は、苦惱と悲しみと怖れに打ちひしがれていった。そして、遂に、ある日、夫は逮捕されて、それきり、帰ってこなかった。しばらくして、彼女は、夫の身の回り品を持って、ある指定された役所に出頭するようにとの通知を受け取った。切符売り場のような窓口が並んでいた。夫の名前を記した窓口から、持っていった品々を入れ、受領書をもらった。彼女と同じような人々が手に手に荷物を下げて、長い列をつくっていた。彼女は遂に夫には会えなかった。極東の流刑地から一度便りがあったきりであった。許可をもらって、英国に里帰りしていた彼女は、マースキーの忠告に従って、二度とロシアには帰らなかった。

ソヴィエトという巨大な機械が無害な昆虫である若い女性とその夫の人生を切断したのである。無力な二人の人生を破壊するのに、2本の手を持ったエンジンが、一度その戸口に立てば十分であった。レナードの心を逆撫でし、困惑させたのは、共産主義や独裁国家の野蛮さを貫

くこの一筋の硬化した感覚であった。レナードは、彼女を通して、支配するものと支配されるものが互いを恐れあいながら生きる悪夢を垣間見たのである。

1937年はロシアの大詩人プーシキンの百年忌であった。彼女は、まだ英訳されていない詩人の短い原稿をレナードに渡した。彼女の女友達の素晴らしい訳によるものであった。1936年、ロンドンのタヴィストック・スクエアにあるホガース・プレスで、この英訳原稿を出版することは、微妙な問題であった。それは、ロシアに住む一人の女性を生死のはざまに立たせることであったから。百年前に没した詩人の遺作がロンドンで出版されるか否かは、ロシアの政府と秘密警察と、支配されている人々との間の恐怖の軽重次第であった。彼女の工夫で、レナードは出版の意向を「誕生日おめでとう」という祝電として送り、相手は承諾であれば、「お祝いありがとう」で返す。そうでなければ、返信はしないという取り決めにした。返信はなかった。

レーニンの演説を英国で出版することが、英国国民の利益を損なうかのように、禁止せずにはおれない英国政府と、百年前に没したプーシキンのささやかな本の出版を流刑や粛清の恐怖で阻むソヴィエトの根っこは同じである。思想や意見を政府や警察が検閲しているうちに、その権力は悪性腫瘍のように自己増殖して、自らの基盤、即ち、社会の精神を破壊してしまうのである。このように、戦後の世界では、政治権力が個人の生活に浸透し圧迫するようになった。

レナードにとって生きるということは、個性と折り合った人生を日々創り出すことである。この地上におかれた存在である限り、命あるものは、命の固有性に沿って生きていけるはずである。個々の命が調和している状態を人は自然と名付けた。その自然に属しながら、人は自然から離れて暮らす方向を選んできた。自然と離れるほどに、社会はより組織化される。そして組織するものと、されるものが、支配被支配の権力関係に組み込まれていく。レナードは、組織から脱出することを夢見るのではなく、社会をより平等な個人のつながりを許容する組織にすることを願った。その表現の1つが、国会議員への立候補だった。

尤も、政治ジャーナリストとしてのレナードの眼には、議員の生活は味気ないものに映っていた。終日、入れ替わり立ち代り客が訪れる度に、どうでもいいような用件や雑事にオフィスの時間は浪費され、大事な事柄はオフィス以外の場所で処理された。議員自身はロンドンのいわゆる一流のクラブの会員になり、次の選挙の票を数えて時を過ごさねばならなかった。この気の滅入る議員生活を想像して、しばらくためらいはしたが、レナードはついに及び腰のまま立候補を承諾した。しかし、彼に決断させたのは、実は、ハーバート・フィッシャーの対立候補として彼と競ってみたいという対抗心であった。ハーバートは、ヴァージニアの従兄弟で、典型的な上層階級の英国紳士であった。名門大学の役職にあったが、その見栄えの良さが、ロイド・ジョージの抜け目のない眼鏡にかなって、1916年に文部大臣になった。静かな学究生活から、政治の中枢に身をおいてみると、総ての情報が集まるダウニング街の変化に富んだ活動的な生活は、ハーバートを限りなく魅了した。ロイド・ジョージの内閣が倒れて、再び大学に戻ってからも、政治家であった頃のことを、ロイド・ジョージの思い出を語って飽くことがなかった。彼は、19世紀風の紳士淑女から受け継ぎ、更にオックスフォードで磨きをかけた上品

さに、ほどよいユーモアと慎みを交えて、ダウニング街に身を置いたことのないものには決して知り得ない当時の情景を陶然と話し続けた。彼が自由党の引きたて役を演じていることが、身近な人であるだけに、一層レナードの対抗心を煽ると同時に現実の政治を動かしてみたい気持ちをもかきたてたのである。

19世紀英国の豊穡な文学に養われた感性のおかげで、レナードは、人物描写にすぐれている。彼は自身の利害関係や好悪の感情を隠すことはないが、同時に彼の明晰な知性に支えられた寛容さのおかげで、人様々の面白さを生き生きと伝えている。しかし、彼の、フィッシャー・ハーバートにたいする対抗心は、つぎのようなエピソードを披露させずにはおかなかったであろう。

週末にフィッシャー家に招かれたエイドリアン・スティーブン（ヴァージニアの弟）は、客間のベッドの毛布が短くて（長身だったので）、寒くてたまらず、カーペットを引き剥がして、寒さを凌いだまではよかったのだが、それを元通りにすることができずに帰ってしまった。それ以来、彼は招待されることはなかった。典型的な上流紳士であるフィッシャー教授の切り詰めた暮らし向きを、からかわずにはいられないレナードの子供っぽさを垣間見せてくれるエピソードである。

レナードが予期していたように、選挙では最下位で落選する。彼は、当時の演説の要旨を引用しているが、直接の利害に左右され勝ちな選挙において、当選は難しかったであろうとおもわせるものである。

かれは、労働党に属する「7 大学協会」から立候補すること。戦争のない平和な世界にするためには、保守党や自由党でなく、労働党によって従来のやり方に決別する必要があること。国際的には、戦後処理として、ドイツに過大な賠償を要求しないこと。ロシアの承認と貿易の促進。米国との協力。インドの自前の政府の容認。いわゆる帝国主義政策を放棄すること。さらに国内では、小学校から大学までの教育を充実させることを主張した。これらのことが、世界再生の自明の手段であったことは、その後の歴史が証明することになるのであるが、どの時代にも、既得権を自ら手放すように説得するのは、国家に対しても個人に対しても不可能である。レナードは、結果を見通したうえで、敢えて自らの理想を表明したのであったから、落選しても、しおれることはなかった。勝負は世の習いと矛を収めるのが彼の処世術であった。

彼は大学協会加盟の大学へ選挙演説に出かけたが、聴衆は少なかった。彼らは、唯、物静かに、じっとテーブル・クロスを眺めているという風であった。ダラム大学では、司会者から次のような言い訳を聞かされた。大学がその地方の裕福な保守黨員から財政上の援助を受けている故に、労働党の支持をあからさまにするわけにはいかないというのだった。

訪れた北部の工業都市の暗く湿った街並みはレナードの気持ちを沈ませた。かれの選挙演説があまりいい印象を与えなかったせいでもあったであろう。演説と言うものは、えてして、内容よりも、語調の力、聴衆を酔わせる力が物を言うことを彼は知っていた。そのためには、先ず、彼自身が陶醉しなければならない。しかし、彼のいわゆる内省癖のせいで、声調や雰囲気

に頼ることを避けたのであろう。話の内容で勝負したかったであろう。そうはいっても、思ったほどの共感が得られなかった虚しさは免れなかった。徒労感を紛らせるために、彼は動物園を訪れた。なじみの薄い都市や地方に行き、汽車や飛行機の待ち時間が中途半端で所在無い時、彼はよく動物園に行った。野生に親しんできたレナードにとって、動物を檻に閉じ込めることには、気が咎めるものがあったけれど、動物園の建物や運営、そして、そこに囲い込まれている動物たちは、その土地の性格と奇妙なほど一致しているのが面白かった。ロンドンの動物園のライオンたちは、まるでサウス・ケンジントン生まれの、手に負えない、いたずらっ子たちを彷彿とさせた。イスラエルの動物園の猿たちは、街で行き交う、ユダヤ教徒に似て、何千年この方、ひたすらに先祖の教えを守ることで、自足しているかの如くであった。コロボの動物園では、牡ライオンが、じゃれつく仔ライオンに、苛立って立ちあがった時、母親のライオンが、ゆっくりと、間に入り、牡ライオンを威嚇して、子供たちを安全な場所に連れていく様子は、我が子を危険から守って暮らすシンハリ族のたくましい女たちを彷彿とさせた。人間を、囲い込まれた動物に擬することで、レナードは、共感を得られない寂寥感と苛立ちを自ら宥めている。

現実に、下院議員に立候補してみて、支持者たちの臆病さを目の当たりにし、自らの理想とその政策の訴えも、聴衆の感動を呼び起こすまでにはいたらなかったのは、予期していたとはいえ、レナードを心底、落胆させたに違いない。鬱屈の時、動物や植物の次元に移行することで、人の世を外から眺めることで、気持ちの均衡をはかったのであろう。

社会との関わりは政治的なものである故に、めまぐるしく流動する日々であったが、私的な生活の中心は、常にヴァージニアの健康を保ち、彼女の生命そのものである創作活動を可能にしておくことであった。レナードは、彼女の集中の持続がどんなものであったかを、『再出発』で述べているが、彼女を極度の緊張に追い込んだのは、作品を世に出す決断の時期であった。

ヴァージニアは病的なほど批評に敏感であった。彼女にとって、作品は分身であった。母親にとって、子供が分身であり続けるように、作品は完成しても、依然として彼女の分身であった。それ故、いささかの無視も批判も、我が子へのそれに苦しむ母親と同じように、ヴァージニアにとっては、拷問であった。その拷問は、最後の一語を書き終えた瞬間から始まるのだった。最初の校正から、出版されて、書評や批評や友人知人の意見が出尽くすまで、それは断続的に続くのである。しかし、過度な鋭敏さにもかかわらず、彼女には、デスモンド・マッカーシーには欠けていた強靱な知性と精神があった。批評家にも、世間に対しても、その冷酷さを跳ね返す気力を発揮した。構うことはないと言って、分身を世に送り出した。

作品に極度に高い完成度を求めずにはいられないヴァージニアにとって、出版社のスタッフの思惑に満ちた評価は耐えがたい苦痛であった。先に述べたように、ヴァージニアの気分転換にと始めたホガス・プレスは、予想をこえて、発展し、今や立派な事業になっていた。印刷も出版も、二人して、インクで手を汚し、製本をし、直接に予約者に届けていたものが、『キ

『ユー植物園』の出版を境に本格的な出版社へと姿を変えていった。この作品は、また、ヴァージニアの、その後の、まだ書かれざる作品のすべてを、胚胎しているものであった。二人の人生の中心は、書くことであった。今や、自らの著書を自らの手で出版できることは、ヴァージニアにとって、ことのほか、心休まることであった。レナードは、その頃、ヴァージニアが書き始めたばかりの『ジェイコブの部屋』の出版を、彼女の異父兄のダックワースに委ねてあったのを解消することができた。

一方、ホガース・プレスを正式の出版社にするにあたって、社員を探すことが、レナードの絶えざる難問になっていった。実は、社員にフルタイムで出版の仕事をしてもらい、ヴァージニアと彼は、執筆の合間に手伝うというのが、レナードの最初の見論であった。社員を探す段階で、リットン・ストレッチが介入してきた。『ヴィクトリア朝の偉人たち』の成功で、著名人になっていた彼であったが、レナードの眼には、実に奇妙な三角関係の生活を送っていた。ストレッチに献身的な愛を捧げている画家のキャリントンと、彼女を熱愛しているラルフ・パトリッジがストレッチの邸に同居していた。彼は、このラルフを試用社員として、強引に推薦してきた。ゆくゆくは、共同経営者にするのが条件であった。この青年は見た目のたくましさとは裏腹に、情緒過多で、感情が昂ぶるとすぐ涙ぐんだ。キャリントンは、スレード画塾で学んだことのある画家で、レナードの分類に従えば、古典的な女性—男が追えば逃げ、男が逃げれば追って行く—であった。彼は、恋するラルフに指南した。彼自身ではなくて、彼女のこめかみにピストルを突きつけて、結婚の諾否を迫り、彼女が拒絶すれば、断固として立ち去る意思を示すようにというものだった。二人は結婚した。

ラルフのおかげで、ホガース・プレスは見る間に出版目録を増やした。出版に値すると評価した本だけを出版し、その装丁も大胆で、カバーのデザインも、従来の造本の感覚からすれば、響響を買うほどに色彩豊かであった。『ジェイコブの部屋』はヴァネッサが装丁したが、後期印象派風(かぶれ) だと言わんばかりに嘲笑うものもいた。当時、ホガース・プレスにあたる世間の風は冷たかった。出版した本の内容も装丁も、彼らの目には、突飛でけばけばしいものであった。しかし、見る間に、あらゆる本が明るい彩りの装丁に包まれるのに10年ばかりかからない時代になっていった。

T. S. エリオットの『荒地』、ロバート・グレイブスの『羽ぶとん』、ロジャー・フライの木版画、ハーバート・リードとクライブ・ベルの詩集を出し、ドストエフスキーの『悪霊』の、出版されていない章を含んだ『スタヴロギンの告白』はコットがゴールキーを通して手に入れたものであった。コットの翻訳にレナードとヴァージニアが協力した。ホガース・プレスが出した書物は、他の出版社のものとは比べると、装丁も大きさも一般のものとは違っていたし、内容となると、全く馴染のないものであった。しかし、1965年の今、どの出版社も出版目録から省きたいと思うものは、これらの中にはないであろう。

一方、当てにしていたフルタイムの勤務をラルフは承諾せず、結局、辞めていった。レナードは、今、改めて、岐路に立たされている自分に気付いた。出版業に専念してくれるパートナ

一を得て、自分は執筆と政治活動に没頭し、暇な時間に本作りをするというのは、独り合点の夢であった。出版を止めるべきかと迷う反面、ホガス・プレスが将来を囑望されていることにも悪い気持ちはしなかった。

そんな時、二人から申し出があった。一人はいわゆる文化人を自認するアメリカ人で、心ゆくまで、洗練された装丁の本作りを提案した。それは、読むための本ではなくて、鑑賞し値踏みするための品物としての本であった。レナードにとっては、もっとも苦手な相手であった。観賞用としての本作りを持ちかけられたのは、ヴァージニアの世間に与える印象の所為だとレナードは考える。彼は、自分しか知りえないヴァージニアの姿を強調する。彼女が、象牙の塔にこもった、ガラス細工のような上流の社交婦人であるかのように言われるのは、全くの見当違いであって、いわゆる趣味人とは程遠く、スティーブン家の骨太な知性を受け継いだ作家であることを強調している。確かに、製本に関しては、紙質にこだわり、斬新なデザインや色彩を打ち出しはしたけれど、ホガス・プレスが出した本は、鑑賞するためのものではなくて、読むに値する内容によって、評価されてきた筈である。もう一人は、ハイネマン社の申し出であった。呑み込まれば、ちっぽけなホガス・プレスは影も形も見えなくなるであろう。経営の岐路に立って、レナードは、セイロンでの官僚としての自分自身を振り返り、同僚や上司と安定した関係を保つのは苦手であったが、部下とはうまくいったことを思い出した。強烈な志向性を持ったレナードは、利害を共有するパートナーにとっては決して働きやすい相手にはなれなかったのだと自省している。錯綜した交渉のさなかに、偶然出会ったマジョーリー・トムスンという若い女性をラルフの後任として、迎えることができた。1923年、一月のことであった。1924年、3月にホガス・プレスはリッチモンドからブルームズベリーのタヴィストク・スクエアに移転した。以後、出版事業は急速に発展することになる。

移転するまでの4年間の仕事は、片手間のものとは思えないほど、充実したものであった。ヴァージニアは、1922年に『ジェイコブの部屋』を出版し、『ダロウエー夫人』を執筆し、『普通の読者』を準備し、書評による収入をも得ていた。レナードは、フェビアン協会の依頼で、『アフリカにおける帝国と通商』を書いた。それは374ページに及ぶもので、アフリカにおける帝国主義研究では最も早いものの一冊であろうと自負している。

1920年にフィリップ・スノウドン(1864-1937)の依頼で、『社会主義と協同組合』を書き、25ポンドを得た。これは、独立労働党が出している『社会研究』シリーズの一冊であった。20年代の労働党は、ラムゼイ・マクドナルド、アーサー・ヘンダスン、フィリップ・スノウドンの三頭支配であったが、一番平凡に見えるヘンダソンが、実は一番、政治家としての見識も人格も備えているとレナードは考えるようになる。若し、マクドナルドではなくて、ヘンダソンが労働党の党首であり、首相であったら、労働党の歴史も英国も、そしてヨーロッパでさえ、今とは異なって、破壊も少なかったのではないかと振り返っている。労働党の上層部には、確かに知的な黨員も多かったが、党としては、知性を疑い隠し、知に拠って行動する人を恐れ、毛嫌いするという英国流の気風を逃れることができずにいるとレナードは批判する。彼がいう

知性とは、感傷的にならずに、物をありのままに見ることであり、目的と手段を取り違えないことである。この著作でも、彼は、協同組合運動というのは、あくまでも手段として、消費者が生産を制御することであり、目的は、文明化された社会をつくることであることを強調した。しかし、現実には、すべての人が仕事をするのは、金を手にするためである。消費が必要とするものを生産するために働くのではなくて、それぞれが利益を、金を得るために働くのである。マルキストも同じである。彼らも又、無意識のうちに、資本主義心理を許容している故に、資本家同士の競争を労働者の階級闘争に置き換えただけである。それに対して、英国協同組合運動は、生産と流通を消費者が制御する運動である。生産と生産者の利益を最優先させる資本主義と社会主義の心理構造を変えようとする運動である。生活に必要なものを生産するために人は働き、互いに報酬を与え合う。これが人間の暮らしの自然な姿であろう。しかし、生産手段が世界規模になるにつれて、生産物の交換手段であった貨幣が今や王座を占めている。手段と目的を見過たないのが知性である。従って手段を目的化することによって、身勝手な欲望を満たしている人々は、意識的にも無意識的にも、知性を厄介物扱いにする。この知性忌避の態度が英国社会の気風をなしているとレナードは批判する。これは、彼の生涯を貫く判断の基準である。

この4年間、レナードは、政治ジャーナリストとして働くのだが、新聞雑誌に記事を書く経験をすると、自分の文章が、人々の心に消えることのない影響を及ぼすと信じ込んでしまうことに気がつく。しかし、現実には決してそうではなく、字数に対して支払われる稿料以外は、海に投げ込んだパンが水を吸って跡形もなく沈んでしまうように、虚しいものだと実感する。又、彼は、編集者や平和主義者が、往々にして、暴力的な欲望を秘めているのを感じる。ネイション誌のスタッフに加わった時には、マッシングガムの人柄にこの心理を垣間見る。彼は、物静かな人物で、レナードの書いたものに目を通して、ほとんど手直しすることはなかった。しかし、不思議なことに、活字になってみると、マッシングガムの雰囲気や漂わせた文章になっていた。彼は決して声を荒げることはなかったが、ロイド・ジョージを批判する時の言葉の痛烈さにレナードは内心驚愕した。所詮、人は温和な文明人の域内に四六時中止まり続けることは難しいばかりでなく、非常に辛いことなのだと思える。フロイトが『文明と欲求不満』を書く1900年前、既にホラティウスが「持って生まれた性質は、熊手でかき出すことはできるが、すぐ又もどってくる。」といったように、マッシングガムが静かにロイド・ジョージを罵倒したのも文明人である故の緊張感のなせる業だったのだと、レナードは推し測っている。

一方、ヴァージニアは徐々に健康を取り戻してパーティに出かけることも多くなった。彼女は、パーティには格別の興味を持っていて、社交界の形式ばったものであれ、気の置けない友人同士のものであれ、そこで展開される人間模様の中に身を置いては、その刺激に興奮したり失望したりするのであった。レナードは社交界のパーティは全く好まなかったが、時として、ヴァージニアに同伴することで、総理大臣や著名人、流行作家などの集まるパーティを観察す

る機会を得た。彼は、1920年代の社会の、今は消えてしまった一断面として、典型的な上流社会の正式なパーティの輪郭を鮮やかに伝えている。

ガーシントンで、オトリン・モレルが開くパーティと対照的なパーティがモンクス・ハウスで開かれるようになった。なんといっても、質素なしつらえしかない家であったから、招くことのできる客といえば、既に親しい友人ーリットン・ストレイチャーや、E・M・フォスターか、親しくなれる人ーT・S・エリオットに限られた。レナードは、知的で自由な会話を楽しむことのできる人々と週末をともにするパーティを歓迎した。

エリオットの詩集を最初に出版したことを、レナードが誇りとも喜びともしたことは、既に述べたが、ここでは親しい友人となっていくエリオットを浮かび上がらせている。モンクス・ハウスにエリオットが客になった或る日、三人並んで川辺へと散歩していた時、レナードは不図、立ち止まって二人をやり過ごしておいて小用をたした。その気配を悟ったエリオットはすっかり動転したようだった。レナードが率直にそのことに触れると、彼は、自分には決してできない。妻の見ているところでは、髭をあたることさえ憚られると白状したが、それがきっかけで、その後は、すっかり寛いで話が弾むようになった。文学の話になると、彼は自由闊達多弁であった。特にヴァージニアの批評眼には一目置いていた。それから十年程経った頃、彼は、書き上げたばかりの詩を批評してもらいたいとやってきた。それは「灰の水曜日」として出版されることになる原稿であった。彼は、例の単調な声音でその詩を朗読し、同席した人たちが順に別室に呼ばれて批評した。まるで、彼の詩を批評するというより、彼に口頭試問をされている風であった。ヴァージニアの批評が最良のものとして受け入れられた。『荒地』において、現在分詞を行末において成功した手法が習慣にならないようにというヴァージニアの意見をエリオットは喜んで受け入れたのだった。

親しさが増していった様子は、ヴァージニアの日記に記されている。「青白い大理石のようなエリオット」が「批評家が僕のことを、学者風で冷たいと言うが、本当はそうではない」という言葉を記し、「冷たさが、少なくとも、彼の泣きどころだと思う」と付け加えるヴァージニア。1921年が終わる頃には、彼をトムと呼ぶようになり、ヴァージニアは「残念ながら」彼を恐れなくなっていた。⁽¹⁾

ヴィタ・サックヴィルと初めて出会ったのは、1922年の12月であった。ヴィタは、この上なく端麗な貴婦人で、堂々とした物腰は傲慢でさえあった。レナードは、人が「闊歩する」のは、小説の中でだけだと思い込んでいたのだが、ヴィタは、現実に闊歩していた。レナードは、或る夏の午後、車に乗せてもらってロンドンの街を通ったことがあったが、彼女はかなり派手な運転をして、タクシー運転手に抗議された。ヴィタは、自分に落ち度があるのに、非難するその運転手を逆に叱り飛ばした。その口調には、六百年前、ケント州のサックヴィル家の人たちが農奴に向かって使っていたであろう口調を連想させるものがあった。彼女が寛げるのは、豪華な城だけであったが、レナードにとって、どうしても寛げない場所が城であった。執事や銀器やペルシャ絨毯やイタリヤの家具に加えて、あらゆる近代的設備の整った贅沢な暮らし方は、

レナードの暮らしとは無縁のものであったが、それはそれとして見事に美しく魅力のあるものであった。ヴィタの城に対する情熱は、終にシンシングハーストの荒れた城を買い取らせ、素晴らしい庭園を作り上げて、毎年数千人の人々を引き寄せた。大方の人々が中年から老年にかけて、窓の外の荒れ野をみつめて暮らすのに、望むままの庭園を完成させたヴィタは最も幸せな人たちの一人であったであろう。

しかし、レナードがヴィタを評価するのは、その純一な精神であった。この精神が彼女を詩人にし、『大地』という一巻の詩集を書かせ、決して純一とは言い難い華麗な城や庭園を出現させ、彼女の他の資質と結びついて、多様な人々を魅了してやまなかったのである。

ここまで来て、レナードは、いわゆる「ブルームズベリー・グループ」の由来を簡潔に述べている。今は消え去った日々を、特に精神の旅路を次の世代に伝えること、それが、個人という命の輪をつなぐことであり、文明を継続させることであると彼は考える。1912年から1914年の3年間の集まりを、彼は、原ブルームズベリー・グループと呼ぶ。13人のメンバーであったが、ブルームズベリーに住んでいたのは、クライブ、ヴァネッサ、グラント、メイナード・ケインズ、レナード、サクソン・シドニー・ターナーの8人であった。そのうちに、リットン・ストレーチー、ロジャー・フライ、モーガン・フォースターが居を移してきて、以来、絶えず顔を合わせるようになった。しかし、第一次大戦が彼らをばらばらにし、レナードは、ヴァージニアの健康を考えて、二人はリッチモンドの郊外に移り住むことになったのである。戦後、ヴァージニアの調子も良く、パーティや他の会合でロンドンに出かけることも多くなり、やがて、1920年に、ゴードン・スクェアで最初のメモアール・クラブの会が開かれた。彼らは、完全に率直であることを前提に自作の発表を行った。しかし、振り返ってみると、最も親密な間柄でさえ、絶対的な率直さとは言っても、結局は、相対的な率直さであり、絶対的な真実も時としては、慎みや寡黙に濾された真実であった。最初の頃は、読み上げられる回想は短いものだった。1回目は、7人が読んだ。しかし、次第にそれぞれが長くなり、数年後には、二人しか読めなくなった。その中には、ケインズの、ドイツ代表との交渉を綴った素晴らしく洗練された回想があり、ヴァージニアのもの、ヴァネッサの、錯綜した家庭の危機を描いた才気溢れるエッセーもあった。

時は移り、古い世代が世を去り、新しいメンバーが加わって、クラブも変化した。最後の会合は、レナードの記憶するところでは、1956年であった。

こうして、ロンドンに出掛ける回数も増え、込み合う列車で夜遅くリッチモンドに帰宅する疲労にもまして、ヴァージニアが田舎住まいの閉塞感や単調さに不満を募らせたこともあって、レナードは遂にロンドンに移る決心をした。ロンドンに住むことは、ヴァージニアの健康を不安に曝す機会が増えることを意味した。彼女は、パーティだけでなく、どんな会話や交際であっても、人一倍自らを消耗する質であったから、リッチモンドは、いざと言う時の、静寂を保てる隠れ家として、レナードにとっては捨てがたい安全弁であった。彼は、功罪を慎重に秤にかけた上で、ロンドンに生活の本拠を移す決心をした。住まいを移すことは、ホガース・プレ

スもロンドンに移ることであった。それは同時にホガース・プレスがロンドンに進出することであった。

注

- (1) Woolf, Virginia *The Diary of Virginia Woolf Vol. II 1920-1924*
London: Hogarth Press 1978 67-69, 90-91, 100.

参考文献

- Woolf, Leonard *Sowing An Autobiography of the Years 1880 to 1904*
Growing An autobiography of the Years 1904 to 1911
Beginning Again An Autobiography of the years 1911 to 1918
Downhill All the Way An Autobiography the Years 1919 to 1939
The Journey Not the Arrival Matters An autobiography of the Years 1939 to 1969
London: Harcourt Brace 1975